



司馬遼太郎

国盗り物語

第一卷

斎藤道三

前編

新潮社版



国盗り物語 第一卷

——斎藤道三（前編）

昭和四十年十一月五日 印刷
昭和四十年十一月十日 発行

定価 三四〇円

著 者 司馬遼太郎

発 行 者 佐藤 亮 一

発 行 所 株式会社 新潮 社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(291)一一(大代)
振替 東京 八〇八番

乱丁・落丁のものはお
取替いたします。

目

次

開運の夜	七
奈良屋のお万阿	一四
運さだめ	三
小宰相	元
京へ帰る	七
淫楽	四
有馬狐	五
兵法者	五
お万阿悩乱	六
初更の鐘	四
奈良屋の主人	八
奈良屋消滅	八

水	槍	槍術『一文銭』	お万阿問答	京の夢	西村勘九郎	深芳野	朱唇	金華山	常在寺	美濃へ	歓喜天
馬	槍										
一七	一六	一五	一五	一四	一六	一三	一三	一六	一〇	一〇	九

林	の	中	で		一八
天	沢	履			一七
虎	の	瞳			一四
深	芳	野	を奪る		二〇
川	手	城			二七
火	炎	劍			二三
那	那	姫			二〇
府	城	乗	っ取り		二六
大	狂	言			二三

国盗り物語

第一卷

斎藤道三（前編）

開運の夜

落ちついている。

声が、である。

その乞食は、御所の紫宸殿のやぶれ築地に腰をおろし、あごを永正十四年六月二十日の星空にむけながら、夜の涼をとっていた。

風は、しきりと動いている。

御所とはいえ、もはや廃墟といいいい。風は、弘徽殿、北廊、仁寿殿の落ちた屋根、朽ちた柱のあいだを吹きとおりつつ、土塀の上の乞食のほおをなぶっていた。

世は、戦國の初頭。――

「国主になりたいものだ」

と乞食はつぶやいた。

ひとがきけば狂人とおもうだろう。が、乞食は大まじめである。事実、この夜のつぶやきは、日本史が永久に記憶しなければならなくなった。

「草の種ならば、種によって菊にもなれば、雑草にもなる。が、人間はひとつの種だ。望んで望めぬことはあるまい」

乞食。――

敵密には乞食ではないのだが。

京の西郊、西ノ岡のうまれ、――かつては妙覚寺本山で、

「智恵第一の法蓮房」

といわれた若者である。

智恵第一どころか、「学は頭密の奥旨をきわめ、弁舌は富妻那（釈迦の弟子・古代インドの雄弁家）にもおとらず」といわれるほどの学識もあつた。

舞もできる。鼓も打て、笛を唇にあてれば名人の域といわれ、しかも、寺で教わりもせぬ刀槍弓矢の術まで、神妙無比の腕に達している。

いまの名は、松波庄九郎。――

おもうつところがあつて衣棚押小路の妙覚寺大本山をとびだし、還俗した。

髪をのびしはしたが、京は応仁以来の戦乱で荒廃し、諸国はみだれ、さて食えるあてはない。

戦國。――

といつても、この松波庄九郎、つまり後に戦國諸大名を懐えあがらせた斎藤道三の若いころは、まだ、家門がもの

をいう時代で、いかに有能でも、氏素姓もない庄九郎をいきなり士分に召しかかえる大名はなかった。

（——足輕かせぎなら）

口はある。

が、この自負心のつよい若者には、足輕奉公などは、死んでもいやだった。

ついに、乞食に落ちぶれてしまった。

「王にはなりたくないが」

と、庄九郎は、背後の内裏をみた。庄九郎だけが乞食ではないのである。

灯がひとつ、ともっている。

そこに、この国の天子が住んでいる。庄九郎とかわらぬ極貧人で、毎日雑色が、「閔白袋」と称する袋をさげて京都市中をまわり、一握りずつの米をもらいあるき、かろうじて御所のその日の煙をたてていた。

先帝（土御門帝）が亡くなられてすでに十八年になるが大喪もなされていない。当今の後柏原帝が踐祚されてこれまた十八年になるが、即位の費用もない。

「王にはなりたくないが、將軍、それがわりならばせめて国主になりたいものだ」

「夢じゃ」

と、足もとで笑った男がある。

やぶれ築地の下で、犬のようにうずくまって臥ている。

庄九郎が、妙覚寺大本山をとびだすとき、

——わしを家来にしてください。

と付いてきた赤兵衛という寺男である。気は、はきく

が、妙覚寺でもてあましの小悪党で、盗み、かどわかし、にせ祈禱師、やらぬ小悪事はないという男であった。

麻の襦袢をきて繩を一すじ腰にまいているが、野太刀だけは一本、だじそうに右肩から背負い掛けていた。

その点、庄九郎もおなじである。

「なにが夢かよ」

庄九郎は、星にむかつてうそぶいた。

「ふん」

赤兵衛は、あざわらった。

「夢ではおざりませぬかい。お前様のようなお人に付いて出たがために、とうとう乞食になりはてしてしまうた」

「将来は、榮耀榮華を見せてやるわ」

「すえのことよりも、いまの一碗のひえがほしいわい」

「乞食め」

庄九郎は笑った。

「これは心外。お前様も乞食ではおざりませぬか」

「物乞いはするが、将来に望みはもって生きておる。一碗の望みで夢をうしなうようなやつを、乞食とはいふぞ」

さわやかな声である。

貌は、異相であった。

この男の肖像画は、現今、岐阜市本町の日蓮宗常在寺の
寺宝として遺っている。

住職は、同市の中学校の教頭をつとめているひとで、筆
者のために、すでに四百年をへたその絹地の幀をひろげて
くださった。

岩彩は変色剥落している。

が、しさいに描線をたどれば、たれの眼でもありありと
その骨柄、人相をうかがうことができる。

丈の十分にある筋肉質の骨柄で、贅肉はない。

顔は面ながで、ひたいは智恵で盛りあがったようにつき
出ている。下あごは、やや前に出、眼に異彩があり、いか
にも機敏そうな男である。

異相だが、妙覚寺の稚児時代は、

——玉をあざむくほどの美童。

といわれた。

長じていよいよ秀麗をうたわれたが、顔に癖がつよい。

しかしそれだけに、男の旨あじを知った女どもにはたまら
ぬ味があるうと僧侶のころからいわれていた。

「あっ」

起きあがったのは、赤兵衛である。

「わらわら、人の群れが来るわ。この刻限、松明もつけずに
歩いておるところをみると、物盗りではおざりませぬか」

「ほう、物盗りか」

庄九郎の空き腹が鳴った。物盗りなら、きつと食物はも
つていようと思ったのである。

言うはともなく、影が立つ。

きらつ、と光ったのは、長柄の厚刃であろう。

いつのまにか、東山の峰に、月がのぼりはじめている。

「赤兵衛、殺るか」

「殺りましようず」

ふたりは、築地のかげでうなずきあった。

影の群れは、高笑いしながら、こちらへどんどんやつて
くる。

紫宸殿の南階十八段のきざしの下を通して、ななめに
御所をつききりはじめた。

「赤兵衛、つけろ」

「へっ」

走り出た。

庄九郎は、あとに残った。

「謹んで勸請し奉る、本門寿量の本尊」

と心中唱えたのは、こういう大事の場での、坊主のこ
からのくせである。

——仏よ、来い。

と祈るのだ。わが利益のためにはからえ、というのであ
る。むろん、くせだけのことで、自信の強烈な庄九郎に
は、信心のしおらしきなど、かけらもない。

「南無三大祕法事一念三千之妙法蓮華經」

「南無久遠実成之恩教主釈迦牟尼仏」

「南無証明法華多宝如来」

在天のほとけ、みなわがために働け、という庄九郎独创の自力聖道の法である。もともと庄九郎だけでなく、この当時、仏法というのは自分のみの利益のためにあるものと信じている者が多かった。日蓮宗徒だけでなく、浄土門の真宗でさえおなじである。

わが身、法華經の功力さえ信じておれば、

殺すも正義。

盗むも正義。

そんな氣でいる。——もともと、筆者はいう。これはこの戦国当時、一部の法華經信者だけの氣風で、現今、泰平の世に、しかも教学大いにすんだこんにち、こういう法華經の信じかたはない。

乱世である。

(南無、妙法蓮華經)

と念誦している庄九郎には、正信などというものではない、独特の罪障消滅法があるのだ。

「庄九郎様」

赤兵衛がもどってきた。

盜賊らは、かつて御所の宣陽門があったあたりの「左兵衛督宿所」という廃館にあつまっているらしい。

「金銀、食物はいかほど持っておる」

「いやそれが」

赤兵衛がいった。

「生首ひとつなんで。——」

「赤兵衛。それにしてはうれしそうな顔じゃな。察するところ、その生首にねうちがあるのであろう」

「さすがは、智恵第一の庄九郎さま」

はくはくと顔を崩した。

赤兵衛も利口な男だから、筋みちをたてて話しはじめた。

京の東洞院二条。——

そこに、奈良屋又兵衛という畿内有数の油問屋がある。

「油屋なら、とはうもない物持だ。小さな大名ほどの富はある」

庄九郎はうなった。

去年、あるじが亡くなって、いま若後家のお方阿というのが、奥から指図している。

「しっかり者か」

「いえいえ、おとなしい女でおざるが、なにぶん跡取り娘のあがりゆえ、亭主が死んでも手代どもが主従同然に心服しておりますゆえ家業に波風は立ちませぬ」

「跡取りならそうであろうとも。——それでその奈良屋がどうした」

「こんど備前から、荏胡麻^{せごま}を運びます」

「ほう、それは大がかりな」

荏胡麻とは、灯油の材料である。

この植物は、どうしたことか、京都付近ではあまり育たず、中国筋では備前（岡山県）が最大の産地であった。

ほかに、東では、尾張、美濃、西のほうでは、四国の讃岐、伊予などに栽培されている。

ところが、かんじんの灯油の大消費地は、京都、奈良、堺、山崎といった神社仏閣、民家の多い都市である。

それらの町には、店に搾油機械を備えつけた奈良屋のような大資本があつまっているが、原料そのものは、遠国からはこぼねばならない。

その輸送が、大変であった。

なにぶん、乱世である。

途中、盗賊、野伏が跳梁するだけでなく、沿道の大小名そのものが、関所の通過の仕方に苦情をつけては、ときに金銀を強奪したり、荏胡麻をうばったりする。

自然武装隊商が組まれた。

油問屋が、護衛隊長を備え、隊長は請け負った金で牢人どもをかりあつめ、その人数で輸送隊をまもってゆくのである。

その隊商の人数は、牢人をふくめて七、八百人になる、というのがふつうだった。

「はて……」

庄九郎の智恵でもそこがわからない。

「その荏胡麻と生首とは、どんなつながりがある」

「生首というのは、——ほら」

赤兵衛は、指を一本立てた。

「例の春夏悪右衛門でおざりますよ」

「ほう」

異様な名だが、どうせ、本名をかくしたあだ名である。

庄九郎も、名はきいている。

もとは山名家の足軽だったというが、怪力無双といわれ、男で、牢人したあと、あぶれ牢人をあつめては、くちを打ったり、戦さがあれば陣屋を借りて稼いだり、ときには商家にやとわれて用心棒をつとめたりしていた洛中の名物男で、ちかごろは、奈良屋の荷頭（護衛隊長）もつとめている、といううわさを庄九郎もきいていた。

「その悪右衛門が首になったのか」

「左様」

「あの連中に殺されたわけじゃない」

庄九郎には、すべてがわかった。

奈良屋の荷頭といえ、商家の侍大将だから、少々大名の物頭などより収獲^{しうかく}がいい。

その悪右衛門の位置をねらうために、洛中の別なあぶれ者の集団が、かれを襲って首にしてしまったのだらう。

「して、連中は何者だ」

「青烏帽子の源八でおさる」

「おお」

首になった悪右衛門と、洛中を両分していたあぶれ牢人の首領である。

「おれにも、運がむいてきたな」

庄九郎は、長いすねをのばして立ちあがった。風が、びんをほつらせている。

星を見あげた。

「今夜は、おれの一生にとって最初のいい日になるだろ

う」
我智力如是、慧光照無量、寿命無數劫、久修業所得……

と、庄九郎は、ついに僧門当時の癖で自我偈をとなえた。

（われに力あらしめよ）

そう祈ったのである。

いまから、殺戮をする。

餓鬼、外道、墮地獄ども、わが利益のために殺されよ、

——庄九郎の全身に、みずみずしい力が湧いてきた。

「庄九郎さま、どうやら奈良屋の荷頭の位置を、あなた様が横どりなさる、という筋でござりまするな」

「よう見た。おれが取る」

笑った。声をたてて。

澄んでいる。この男の声をさく者は、すべて、これが、まな人間の穢身から出た声か、とおもうほど、清らかである。自分のやることのすべてが正義だ、と信じている証拠だらう。

「しかし、赤兵衛」

「へい」

「まだ読みが浅い。おれはあの北斗七星をみて、もつと将来の将来のおれの相をみた。仏母大孔雀明王経という経には、諸星よく吉凶をあらわす、とある」

「あなたさまの将来は、どうなるので」

「不滅の名を英雄列伝にのこす、とある」

うそだ。

庄九郎は、心中、自分のうそを可笑しながら、淡い星明かりのなかで、小悪党の赤兵衛の眼を、じっと見つめた。

赤兵衛は、がたがた慄えた。恐怖ではない。いいよりのない、はげしい感動であった。

（とほうもない人傑に、おれは付いた。おれの運もひらけてくるだらう）

むろん、のぞきこんでいる庄九郎は、赤兵衛の感動をそう読みとっている。

「赤兵衛、いまから斬り込む。命を惜しんで運をとり落す

まいぞ」

「よう承うけたまわった」

「赤兵衛、目釘——」

庄九郎はツカをたたいて、

「調べておけ」

といった。

赤兵衛は、べっ、と目釘につばをかけた。

二人は、御所のなかを歩いた。

御所のなか、といつても、廃屋同然で、左近さこんの桜、右近の橘のあたりは、すねでかきわけねばならぬほどの雑草でおおわれている。

二人は、日花門の崩れおちたあとを通り、宣耀殿あとの礎石をふみ、やがて、かれらが巢を作っている左兵衛督の廃館の窓に忍びより、やがてつまさを立ててのぞきこんだ。

内部なかに、獸脂の灯が三つ、皿の上でさかんに油煙をあげながら燃えている。

土間の炬に大鍋がかかり、獸肉が煮えていた。それをとまりまいて、五人の男が濁酒にごりをのんでいる。親分の青烏帽子の源八は、そういう異風な帽をかぶっているだけで、ひと目で知れた。

(あいつか)

庄九郎は、相手の短所を読みとろうとして凝視した。

眼の動きは、ややにぶい。

が、灯明りの影で筋肉の一つ一つが隈くまどりされ、胸の谷を体毛がうずめて、すさまじいばかりの巨漢である。

庄九郎は、顔色も変えなかった。

低声で、

——赤兵衛、おのれは北廊のほうの出口にまわって待ち伏せろ。わし一人が斬りこんでますぐに青烏帽子を斃たふす。

——されば？

と、赤兵衛は自分の役目をきいた。

——わからぬか。わしが青烏帽子を斃したと同時に、北廊への出口で、人数が十人も来たかとおもうほどに、その辺をたたきまわり、喚きちらすのじや。これが、松波庄九郎の開運の合戦になるぞ。命をおしむな。

「へっ」

影になって、忍び走った。

庄九郎は、そろりと剣をぬいた。妙覚寺の蔵から盗みだした身分には不相応な、三条小鍛冶宗近の二尺八寸。

抜きはなつと、月を受けてこの作独特の乱れ刃がにぎにぎしく明滅した。

庄九郎は、躍りこんだ。

まず、大鍋を蹴りたおしてすさまじい灰神楽かぐろをたて、

「青烏帽子」

叫ぶのと踏みこむのと、灰神楽のむこうに動く影を斬り

おろすのとが、同時であつた。

「汝ア」

ばっ、と灰が朱で染まつた。

「何者ぞ」

青烏帽子が盛りあがるようにして立ちあがつた。

右肩を割られながらも抜き打ちに斬り返してきた。が、

庄九郎はかわしもせずに踏みこみ、

「南無羅刹ッ」

それが気合なのか、天の鬼神を招んだのか、庄九郎の声がおわたつたときには、青烏帽子は、まっこうからあごにかけて真二つに割られていた。

青烏帽子の乾分は、腰をぬかしている。

「しずまれ」

庄九郎はさわやかに言った。

「奈良屋の荷主は、わしになる」

どの男も、平伏した。

奈良屋のお万阿

その翌日、京は快晴である。

まったく、暑い。

暑いが、戦国百年は、ふしぎと湿気がこんにちよりもすくなかつたといわれている、人も気象も、からりとしていた。

「たれ?——」

と、奈良屋のお万阿が、風通しのいい奥座敷に寝そべりながら、午睡からさめた。

「お客さまなの?」

「へい」

御簾のむこうで、手代の杉丸が、小さな声でこたえた。

「お客さまは、御料人様にお会いしたい、とおっしゃいます」

「睡いな」

お万阿は、唐うちわをゆるりと裾へまわして、蚊を追つた。うちわは、檳榔の葉を張り、金でふちどりしたぜいたくなものである。この品ひとつでも、奈良屋の富のほどが